

## 喜田貞吉の歴史研究と歴史教育論

大野智史\*

### はじめに

明治30～40年代、ナショナリズムの高揚や教科書国定化を背景に、教育者やジャーナリストの間で歴史教育の重要性が認識され始める。また同じ時期、帝国大学出身の若手歴史家の中にも、「久米邦武筆禍事件」以降歴史家が「考証」に没頭していることを批判的に捉え、研究の刷新を求めるとともに、歴史学の研究成果を発信すべきだと考えて教育に関わる者が現れる。本稿が対象とする喜田貞吉もその一人で、1899（明治32）年に自らの主導で設立した日本歴史地理研究会（のち日本歴史地理学会と改称）の機関誌『歴史地理』誌上に教育に関する論文や論説を発表し、1910年には『国史之教育』を出版する。また、1901年に文部省に入省して図書審査官となり、1903年から南北朝正閏問題により文部省を休職する1911年まで、文部編修として国定教科書（日本歴史・地理）の編纂に従事する。このように喜田は明治後期の歴史教育に深く関与した帝国大学出身の歴史家であり、歴史学と歴史教育が分離していなかった時期に、歴史学と歴史教育がどのような関係にあったかを考える上で重要な人物だと評価してよいだろう。

従来の研究では、喜田が『国史之教育』において、「純正史学」で明らかにした「事実」であっても「教育上為にならぬ事跡は教へてはならぬ」<sup>1)</sup>と主張することなどを根拠として、喜田を歴史学と歴史教育を別物として扱った歴史家と評価してきた<sup>2)</sup>。確かに、喜田が小学校令施行規則第五条の遵守をたびたび強調していることから考えても、喜田は歴史教育に携わる際、大日本帝国憲法や教育法令が示す歴史観との対立を避けていたことは間違いない。しかし喜田自身は、歴史学と歴史教育の関係について、南北朝正閏問題発生後に発表する予定であった「南北朝論」において以下のように弁明している。

私は屢々国史の教育を論じ、小学児童に対しては名教上利益なき教材は授くるに及ばぬ、有益なる教材は特に之を重んじて授けよと、繰り返し〜説明して居りますが、それは知識の未だ備わらない、発育の未だ不十分な児童に対する歴史教育の方針であつて、決して臭いものに蓋をせよ、悪いものも牽強附会して善く解釈せよとの意味ではありません。国史教育は必ず真正なる史実の上に築き上げられねばならぬ。ただ被教育者の程度如何

によりて、材料の取捨選択を試み、説明の方法に注意を加ふるを必要とするのみです。（中略）私の意見としては、史学研究の進歩は到底防遏すべからざるもので、今の南北朝の場合に就いて申しても、既に先輩によつて合一の際の事情、合一後に於ける政府の南朝の遺臣等に対する待遇、其の他の事情が明かにされて居る今日、徒に之を隠して、事実を曲げて、虚実の歴史の上に強ひて愛国者を作れ、尊皇者を作れと云ふ様な、そんな方法を採用しません。<sup>3)</sup>

ここで喜田は、歴史教育は子どもの発育に応じた配慮が必要であるものの、あくまで「事実」に基づいて行われるべきだと訴えている。この主張を読む限り、喜田は確かに歴史学と歴史教育を「区別」するものの、歴史学と分離した歴史教育ではなく、歴史学に基づいた歴史教育を目指していたのではないかと考えることができる。しかし従来の研究では、『国史之教育』の分析に比重が置かれたこともあり、こうした側面はほとんど注目されなかった。そこで本稿では、明治後期の歴史雑誌に発表された喜田の論文、論説や学習雑誌の記事、徳島大学附属図書館所蔵の喜田貞吉関係資料<sup>4)</sup>を分析し、喜田が構想した「真正なる史実の上に築き上げられ」た歴史教育とはどのようなものだったのかを解明することを目的とする。

本稿では、まず喜田の研究対象としての「地方」と、「歴史地理」という研究分野に注目して喜田の歴史研究を考察し、喜田の歴史家像を捉える。次に、喜田の歴史研究との関係に着目して、喜田が展開した歴史教育論の特徴を解明する。そして、喜田はどのような「実地教授」を期待していたのか、国定教科書や学習雑誌の記事の分析から明らかにする。

### 1. 喜田貞吉の歴史研究－「地方」と「歴史地理」－

1871（明治4）年に阿波国那賀郡柳瀬村に生まれた喜田は、1893年に帝国大学文科大学国史科に入学する。帝国大学で喜田を指導した歴史家たちは、「本来そうあったままの事実」の認識をめざすランケの実証主義史学を受容し、歴史に関する「事実」の解明を通じて国家に貢献することを志向していたため、研究方法への関心は高かった。その一方で研究対象に関する議論を行うことは少なく、政治史などいわゆる「中央」の歴史を対象とする近世以来の伝統を引き継いでい

\*茨城県立水戸第三高等学校

た。喜田は後述するように実証主義史学における補助学の一つとみられていた「歴史地理」研究に従事する一方、「中央」の歴史を重視する姿勢には批判的で、処女論文「国司制之変遷」で以下のように述べている。

従来俗学者流の史を読む者、多くは中央に専にして地方に粗なるの傾あり、徒らに皮相の現象を見て深く其由来を極むることをなさざるが為めに、興廢を論じて往々其見解を誤れるか如き者亦なきに非ず、彼等は神武天皇の東征を説て、当時日向と出雲と大和との関係を問はず、彼等は景行天皇の七十余皇子を封ぜられたりしを見て、其国造県主等との関係及分封前後の事情を考へず、彼等は熊襲及東夷の反をのみ知て、其反するに至らしめたる来歴を詳にせず、彼等は大臣大連の朝廷に争ふを知て、却て地方の乱れの一層甚しき者ありしを省みず、彼等は大化に土地人民を収めたるを知て、此時已に莊園の胚胎せしを曉らず、又彼等は徒らに延喜天曆の治を称して、其裏面に武士を養成しつゝありしを注意せざるなり、実に彼等は朝廷の歴史を読んで人民の歴史を略し、而して其朝廷の興廢は其人民によりて作られたるを知らざるなり、真正の史を読む者は豈に此の如くなるべけんや、須らく先づ意を地方の状態に注いで之を詳にせざるべからざるなり<sup>5)</sup>

ここで喜田は、天皇や朝廷という政治権力が存在する「中央」と、「人民」が存在する「地方」を対比して捉える。そして「人民」が朝廷の歴史に影響を与えたことを指摘し、「地方の状態」を研究すべきことを訴える。喜田は、それまで歴史家の大半が研究対象として扱う価値を見いだしていなかった「地方」の「人民」を歴史の形成者と評価し、研究対象として認めたのである。ただし喜田が「中央」の歴史に直接影響を与えていない「地方」の歴史にまで価値を認めていたかどうかは、「国司制」を軸に古代の地方支配の実態を描くことに重点を置く「国司制之変遷」の分析だけでは分からない。そこで、「歴史地理」に関する喜田の主要論文を手がかりに、喜田が研究対象として認める「地方」の歴史の範囲を考察する。

まず、1899年に発表された「遠江国浜名湖口の沿革」という論文に注目したい。この論文は『歴史地理』の創刊号に発表されたもので、今後の「歴史地理」研究の方向性を決めるという意図で執筆されたものと考えられる。喜田はこの論文で、古代から明治期まで交通の要衝であった浜名湖口には歴史上「数回の地変」が存在し、そのたびごとに交通ルートが変更されたことを明らかにしている。また「舞坂一里船に乗るも馬鹿乗らぬも馬鹿」などの俗諺や俗歌を史料として用いている<sup>6)</sup>。喜田は「歴史地理」研究の開始にあ

たり、研究対象を政治史以外に拡大し、「人民」の側の史料を用いることで、「地方」の歴史を「人民」の視点から捉えようとしたといえよう。

次に、1903年に発表された「地名の研究に就て」という論文を取り上げる。喜田は『歴史地理』創刊当初から地名を「古代人民の様」を解明できる資料と位置づけてその重要性を指摘しており<sup>7)</sup>、「地名の研究に就て」は本格的な地名研究の開始を宣言した論文であった。その中で喜田は、「元来地名は、みなそれへに、何等かの理由ありて起りたるものなれば、よく之を研究すれば、之によりて、其地に関する種々の事蹟を曉得する事あるべし」と述べ、続けて「こゝに山崎と云ふ地名あらんか、未だ親ら其地に臨まざるも、其地が或る山の端なるを知り、橋本と云ふ地名あらんか、今は其所に橋はなくとも、或時代に、其地に橋の架りしを推測し得べし」と具体例を挙げて読者に地名研究とその報告を求めた<sup>8)</sup>。ここで喜田は、基本的に全ての地名が研究対象となりうることを示唆している。つまり喜田は「中央」の歴史と接続しないであろう「地方」の歴史それ自体に価値を認め、研究対象となり得ると認識していたのである。

以上述べたように、喜田は「地方」の歴史に関して、研究対象をほぼ無制限に拡大し続けたのである。筆者はその背景に、喜田の「社会」への関心があると考えている。「日本歴史地理研究会設立趣意書」の「巻頭言」には、「土地ありて初て社会あり、国家あり、社会と国家とありて初て歴史あり、歴史と地理と離る可からざるの理実に茲に存す」<sup>9)</sup>と述べられており、喜田ら日本歴史地理研究会のメンバーには、歴史は「土地」の上に成立した「社会」と「国家」において存在するとの認識が共有されていたことが分かる。明治期の喜田は「社会」の定義や研究意義を積極的に説いたことはなかったが、研究を進めるなかで、古墳墓研究や民族研究を「社会」の状態やその変遷を明らかにするための研究と位置づけるとともに、1909年には「歴史と言ひますと、申すまでもなく人間社会の変遷を明かにするのが目的」<sup>10)</sup>だと述べている。喜田は統治組織としての「国家」の研究ではなく、「社会」の研究によって、「人民」の集合体としての日本の歴史を解明しようとしたのではないだろうか。

続いて、喜田の研究分野である「歴史地理」の特徴を考察したい。喜田は1896年に帝国大学大学院に入学して「本邦歴史地理特に畿内地方」を研究テーマに設定する<sup>11)</sup>。翌年には、「日本読史地図短評」という書評の中で、「歴史事實は常に地上に於て起り、殊に人間の行為が地理の状況の為に支配せらるゝ者頗る多きが故に、事実の真想を看破せんとするには必ず先づ能く当時の地理に通曉せざるべからず」<sup>12)</sup>と訴え

ている。喜田は、「地方」の歴史の研究を開始した時期に、他方では、歴史は「地上」において「地理の状況」の影響を受けて形成されるという歴史認識に基づいて、「歴史地理」研究にとりかかったのである。

しかし喜田が西洋の歴史書や帝国大学の歴史家から体系的な「歴史地理」研究の方法論を学んだ形跡はなく、1899年、日本歴史地理研究会の設立という形で研究を開始した。喜田はその理由を、「群籍に考へ」る研究と「実地に質」す研究を合わせて行うべき「歴史地理」研究には、「多数の会員」の協力が必要であるためだと説明している<sup>13)</sup>。実際、日本歴史地理研究会は「地理」を「最も価値ある資料の一」と捉えて「実地踏査」の重要性を指摘し、「各地方篤学の士」に協力を求めている<sup>14)</sup>。これらをふまえると、方法論の確立ではなく、「実地踏査」を最優先としたことが、喜田の「歴史地理」研究の第一の特徴といえよう。

しかし「地方」の人々を「歴史地理」研究に取り込む以上、彼らに方法論や目的を示し、学術的なレベルまで研究水準を向上させる必要があった。そこで喜田は1906年、東京帝国大学で「歴史地理学」の講義を行ったのを機に、学問としての「歴史地理学」の体系化を進めていく。同年、喜田は「国史地理資料（一）」において、

歴史地理とは、地理の立場から、人事の変遷を明にしようとする学問でありまして、換言すれば、過去より現在に至るまで、我が国の人文地理が、如何なる風に変遷して来て、今日我等が目撃する様な状態になったのであるか、それを明にするのが、我が国史地理の任務であります。<sup>15)</sup>

と初めて「歴史地理」の定義付けを行い、さらに、従来重視してきた「実地踏査」を「歴史地理」の「入門」「基礎」と位置づけた。

ここでまず注目すべきは、「人事の変遷」の解明を目指すことを強調した点である。喜田は1907年に発表した「地理学に関する余（予）輩の見解」において、「歴史地理」を「地理上の諸現象」を記述する「地理学」の一分野とした上で、「地理上の諸現象」のなかでも「人事」、つまり人間活動に注目する。そして、「人事を説明するに自然地理の影響を以てせんとするは即ち可なり。然れども、進んで他の人事の影響する所を攻究する事の更に重大なるを忘るべからざるなり、人は靈智靈能を有す。従つて。人事は甚しく複雑し、自然地理上の現象の比較的単純なるに似ず。此複雑なる関係を明にして。始めて地理上完全なる説明を下すを得べきなり」<sup>16)</sup>と述べ、特に「人事」が「人事」に与える影響が重大であると指摘し、「甚しく複雑」な「人事」相互の関係を解明する必要を訴える。言い換えれば、喜田は人間活動に影響を与える

要因として、自然現象ではなく政治や経済など他の人間活動を重視したのである。一方で、法則性の解明を目的とすることや、安易に法則を当てはめて「地理上の諸現象」を説明することを批判する。喜田は「地理上の諸現象」の成立には複雑で多様な「人事」的要因が介在すると考え、その変遷を解明することで、「土地」の個別性、具体性を把握しようとした。これが、喜田の「歴史地理」研究の第二の特徴になったのである。

また、「今日我等が目撃する様な状態」を基点として「土地」の成立過程を研究するという姿勢を取ることも注目したい。喜田は1907年に行ったと推定される講演のなかでも、「此の世界の状態を横に研究する」<sup>(マ)</sup>地理学と「過去から現在に及んで其の移り変りをを縦に研究する」<sup>(マ)</sup>歴史学を「合一」して誕生した「歴史地理」は、「今日の人文地理の有様、其の人文地理の有様が過去に於てどう云ふ道筋を経て今日の如く移変ってきたか即ち現代の地理は過去からどう云ふ変遷を経て来たかという其の道筋を研究する」<sup>(マ)</sup>学問だと述べる<sup>17)</sup>。このように「歴史地理」は「今日」「現代」に軸足を置いて研究すべきとする点が、喜田の「歴史地理」研究の第三の特徴といえよう。これは、「歴史地理」を歴史学ではなく地理学の一部と考えるからこそその視点であり、後述するように、教育との接点を作った点である。

以上のように喜田の「歴史地理」研究は、歴史は「土地」の上で作られると認識し、「実地踏査」に重点を置くこと、「地理上の諸現象」における「人事の変遷」を解明すること、現在に起点を置いた研究を行うことを特徴とする。これを喜田の大学院時代の指導教授である坪井九馬三の、「古今東西の色々様々の国がどう云ふ発展をして、或はどう凋落をして、結局は遂に滅亡した、其の盛なのは何故であらう、其の衰へたのは何故であらう其の亡びたのは何故であらうと云ふやうなことを其の国が占領して居る領土の上から考へまして工夫を凝らして其の理由を求める区分があります。之を歴史地理学と申します」<sup>18)</sup>という「歴史地理」の定義と比較するとき、「領土」ではなく「土地」を基盤とした喜田の「歴史地理」が「国」の研究に限定されない幅広い研究を志向していたことが分かる。その幅広さゆえ喜田の「歴史地理」はそのままの形で継承されず、現在の地理学史研究では京都帝国大学の小川琢治や石橋五郎が始めた「正統派」の歴史地理学研究の「前史」として扱われているが<sup>19)</sup>、「地方」のあらゆる歴史を対象とするための方法論や視点を備えた学問分野だった点を評価すべきではないだろうか。最後に、喜田が「歴史地理」研究に従事するなかで教育への関与を深めた理由について、二点指摘しておきたい。

一つは、喜田が「地方」で「歴史地理」研究を行い「実地踏査」を担うべき人々として、教員に期待したことである。喜田は『歴史地理』創刊号において、「小学校教員諸氏に歴史地理の研究をすゝむ」という論説を載せる。その後も『歴史地理』は、発行元が六盟館や三省堂など教科書や参考書の出版社だったことも関係するのだろうが、教科書や教育書の批評、歴史教育や地理教育に関係する論文や論説をたびたび掲載し、1909年には国定教科書についての質疑と回答を掲載した「国定教科書答問」欄を設けるなど<sup>20)</sup>、教員への働きかけを頻繁に行っている。その結果、「歴史地理」に教員を引きつけることにある程度成功したようで、1908年に日本歴史地理学会が開催した夏期講演会の参加者のうち初等、中等教育機関の教員は177人中105人（全体の59.3%）、1909年には参加者337人中222人（同65.9%）、1910年には参加者600人中359人（同59.8%）を占めている<sup>21)</sup>。

もう一つは、喜田が現在に起点を置いて研究する「歴史地理」は、現状を改善することにも貢献できると考えていたことである。喜田は、1908年に「為政者の参考」にするために地方行政区画の研究を『歴史地理』誌上で発表しようとして問題化したことを契機として<sup>22)</sup>、保証金を支払って『歴史地理』を政治雑誌と同様の扱いを受けるようにする。そして「歴史地理」研究の「応用」について、

余輩は、史家が常に純正史学を是れ事として、俗世間外に超然たるのみを以て、昭代の学界の慶事なりとは信ぜず。史家が同時に応用家を兼ね、史学研究の結果を活世界に應用して、政治に宗教に、或は教育に、其他各種の方面に史学上より得たる知識を活用し、以て俗世界に活動するは吾人の希望するところなり。殊に況や吾人の主とする歴史地理学の研究が、多くの点に於て現今の人事地理上の事項と密接の関係あるに於てをや。<sup>23)</sup>

と述べ、「歴史地理学の研究」が「現今の人事地理上の事項」と密接に関係していることを根拠に、「純正史学」の結果を「応用」して「俗世界に活動する」ことを宣言する。

以上のように、喜田は「歴史地理」研究において教員との連携を図ったことと、「歴史地理」研究の成果を教育に「応用」すべきだと考えたことにより、教育への関与を深めていくのである。つまり、「歴史地理」という学問分野の性質は教育と非常に親和的だったといえよう。それでは、喜田は自らの歴史研究をどのような形で教育に「応用」したのか、次章以降で明らかにしていきたい。

## 2. 喜田貞吉における歴史教育論の展開

教育における喜田の業績は、1901（明治34）年以降の民間教科書の検定、国定教科書編纂がよく知られている。しかし喜田は1899年、「小学校教員諸氏に歴史地理の研究をすゝむ」において、既に教育について言及している。この論説は題名の通り小学校教員に「歴史地理」研究を勧める内容であり、その理由が以下のように述べられている。

諸氏は地方にありて其地の子弟を教育するもの、宜しく其地の古今の変遷に通じ、子弟をして其地の今日ある所以を知らしめざるべからず、蓋し国民の愛国心を養成するは国史の知識を普及せしむるよりよきはなく、郷土を愛するの心を養ふは其地の来歴を知悉せしむるよりよきはなし、小学校に管内地誌を授くるの要此にあり、諸氏のまきにつとむべき所亦実に此に存す、忠臣は孝子の門に出て愛国者ば郷里を愛する人士の中に求むべし、而も身を愛するに偏するもの往々信を人に失ひ、愛郷の念稍もすれば地方割拠の僻に陥る事あり、地方の志を修むるもの亦其地方の古伝と実地にのみ依頼し、眼界を広くして他と比較研究する事なくんば所論往々固陋頑迷に陥り、誤謬の断案を下して、為に子弟を誤まり、引ては郷土に固執して他を排するが如き念を養成するなきを保せず、されば之が教育の任に当る教員諸氏は必ず歴史地理の攻究を成すの要あり、諸氏は地方にありて其地の志を修む、攻究に於て最も便を有す、余輩は諸氏とともに攻究に従事せんことを喜ぶものなり。<sup>24)</sup>

ここで喜田は、「郷土を愛するの心」、つまり愛郷心を養成するには「其地の来歴を知悉」させることが最も効果的であると指摘し、愛郷心を持つ者こそが「愛国者」になれるとする。ただし、「郷土に固執して他を排するが如き念を養成する」ことのないように、「他と比較研究する」ことの必要性を強調し、そのためにも「歴史地理」研究を行うべきとしている。

ここでまず注目すべきは、喜田は「歴史地理」研究の開始当初から、子どもに対して自らの住む「地方」（郷土）のことを教える必要があると考えていた点である。この考えは、11年後の1910年に出版された『国史之教育』にも、以下のように語られている。

歴史は、修身とは違つて、地方的の教材に重きを置かなければならぬ。是は歴史に限らず、地理も其の通りであつて、各地方によつて児童の要求する知識が必ずしも同一でないのである。（中略）大体小学校の教育は、善良なる一般的の日本国民を養成するのが目的であつて、特殊の人を作るの教育機関ではない随つて、其の国民と云ふには余程範囲が広いけれども、先づ一般の国民とし

ては、其の地方で生れ、其の地方で成長し、其の地方で活動して、終には其の地方で死ぬと云ふのを普通と見なければならぬ。(中略) 小学校では、卒業したる者が社会へ出て直ぐに間に合ふ様にしたい。随つて其の人の現に生活し、将来活動すべき地方の事柄を成るべく精しく知らせたい。此の必要から云へば、歴史や地理の教科書は全国均一ではなくして、各地方向きの者をそれぞれに別々に作りたいのである。<sup>25)</sup>

ここでは、子どもが「現に生活」し、「将来活動」するであろう「地方の事柄」に重きを置いて歴史を教える必要が語られている。喜田は「地方」の歴史を教える目的に関して、11年前に強調した愛郷心、愛国心の養成という精神的側面の他に、自らの住む「地方」で「生活」「活動」するための知識の教授という実際の側面も強調したのである。そしてそのためには「各地方向きの者をそれぞれに別々に作りたい」と述べ、自らが編纂した国定教科書を否定するかのような発言まで行うのである。喜田は「地方」へと研究対象を広げ、研究の担い手を増やすと同時に、「地方」の人々自身がその研究成果を享受すべきだと考え、教育の場で「地方」の歴史について教えるよう求めたのである。

こうした喜田の主張の中で、自らの住む「地方」の歴史について教えるべきという点に関しては、「郷土」を調査してそれを広めることに対する意欲が高まり、地誌や教科書の編纂が活発になっていた同時期の「地方」の動きと矛盾することはなかった。しかし喜田は「地方」へ研究対象を拡大し、その成果を教育に活用しようとするなかで、「其地方の古伝と実地にのみ依頼」して「固陋頑迷に陥り、誤謬の断案を下」す研究に直面することになる。明治30年代は、全国的に史蹟顕彰が盛り上がりを見せ、「地方」の歴史を「中央」の歴史に引きつけて顕彰する動きが加速した時期であった<sup>26)</sup>。喜田は「地方」の人々の郷土史研究自体には概ね好意的で、「地方」の人々と共に研究する姿勢を見せるのだが、史蹟顕彰に関しては「古物古蹟の研究は、面白いだけ夫れだけ、時としては方角違ひの方へ走つて、飛んだ間違を成すことがあり、その原因は「地方的の感情、即ち一種の愛郷心から、之を歴史上著名なる人物に引きつけたく成る」ことだと述べて<sup>27)</sup>、愛郷心によって「事実」の解明より顕彰を優先した結果、「飛んだ間違」を「事実」として扱ってしまうことを指摘する。そして「証拠を示さずして曖昧なるものを顕彰」することは「古蹟破壊偽古蹟顕彰」であり<sup>28)</sup>、「天下の人民を誤りつゝ、あ」と批判し<sup>29)</sup>、「事実」に基づかない顕彰が人々を間違った方向に導くことも危惧していた。喜田は歴史研究のみならず、教育

(教化)活動の一環といえる顕彰においても、あくまで「事実」に基づくべきだと考えていたのである。こうしたなか、喜田は1901年に開催された日本歴史地理研究会の通俗講演会において、以下のように訴える。

本会顧問文学士喜田貞吉君先づ立つて、開会の辞を述べると共に、現今世に信ぜらるゝ、名所旧跡なるもの、多くは、学者の研究を経ずして、妄誕誤解甚しきを顧みず、世人の之を信じて疑はざるのみならず、更に児童に誤を伝ふるを慨せられ、又一方には世の地理教授の全く歴史を顧みざる為め、乾燥無味のものとなり了して、少年の頭脳に入り難く、殆ど教授の本旨に忤ふの弊を指摘し、これ全く地理と歴史の連環、即ち歴史地理なるもの、智識に乏しきによると断じ、縷々所感と希望を述べて、壇を下らるゝ<sup>30)</sup>

この講演で喜田は、史蹟顕彰の結果、「妄誕誤解」を子どもに教えていることを批判するとともに、歴史を軽視するために「乾燥無味」な「地理教授」が行われているとも指摘し、それは「地理と歴史の連環、即ち歴史地理なるもの、智識に乏しき」ことが原因だと訴える。すなわち喜田は、「事実」に基づき、それだけで子どもの興味を失わせない歴史教育や地理教育を行うため、「歴史地理」を教育に取り入れようとしたのである。

それでは、どのように「歴史地理」を教育に取り入れようとしたのだろうか。喜田は地理教育に関する論説である「地理位ならば」において、「各地の地誌を説くに当りて、よく実地の地文的説明を下だし、産業交通等の沿革現況及び特徴等を攻究し、古人の其地に関して残せる詩家文章等、文学的産物を叙述し、特に其地の歴史的沿革に就て観察する事に注意せしむるが如き、方法に出でざるべからず」<sup>31)</sup>と述べ、「歴史地理」研究と同様に、教育の場においても「歴史的沿革」に着目して地誌を説明するよう訴える。そしてその際、「事実」を誤解なく教えるよう、喜田が講演で繰り返し注意した記録が残っている。例えば1910年に豊浦郡教育会が主催した下関講演会では、「大抵は甚だ複雑した原因から出来て居る諸現象」の「最も重大な原因を捉へて、主として之を以て其の地理的現象を説明するといふのは、特に初等教育などに於て、已み難いことである。併し、余りさういふ風(マア)に流れ過ぎると、其の結果として時としては飛んだ見当違(マア)の説明を下して満足して居る様な場合も随分多い」と指摘し、複雑な「歴史的沿革」を単純化せず、「事実」を正確に教えるよう求める<sup>32)</sup>。また、同年に火曜会で行われた「歴史地理学一斑」という講演でも同様の主張を行っている<sup>33)</sup>。

それでは、時に「事実」を曲げてしまう愛郷心や愛国心を、喜田はその教育論のなかでどのように位置づけていたのだろうか。喜田は下関講演会において、愛国心を「人生まれながらに有して居る」「自然の人情」と捉え、同様に愛郷心についても、人には「互いに其郷土を愛し郷土の為に尽し郷土の発達を喜ぶといふ人情」が自然に存在するとした上で、

更にそれに関して十分な知識を得るといふと益々其念が深くなつて来る、自分の故郷に善いことがあると之を以て自ら誇とする、自分の故郷が他に劣つて居ることがあると他の長所を輸入してそれを助長したいといふ気が起きてくる、十分に地理上の知識を得て自分の国と親しくなつて益々親しみを増して此国を善くしやうといふ念慮を養はねばならぬ<sup>34)</sup>

と述べる。つまり喜田にとって愛郷心は、郷土に誇りを持ち、発展させるための原動力ともいうべきものであり、愛国心も範囲の違いはあれ、同様の役割を果たすものであった。言い換えれば、自らの住む「地方」で「生活」「活動」するには、その「地方」や比較すべき他の「地方」の「事実」に関する知識と、それを自らの住む「地方」の発展に生かそうとする動機としての愛郷心の両方が必要だという考えである。だからこそ喜田は「郷土を愛する念と郷土に執着するといふ念とを区別」するよう求め<sup>35)</sup>、愛郷心が偏狭な形をとらないようたびたび注意するのであり、「比較研究」もそれを避けるための方法の一つだったのである。

最後に、横山達三（健堂）の歴史教育論との比較から喜田の歴史教育論の特徴を浮かび上がらせたい。横山は東京帝国大学文科大学国史科を喜田が卒業した2年後の1898年に卒業し、『歴史地理』創刊8ヶ月前の1899年2月には帝国大学出身の歴史家たちとともに学生の教育を目的として『史学界』を創刊するなど、その経歴や教育への関心において喜田と類似点の多い歴史家である。横山は『史学界』創刊号に発表した「史学界発刊に就き中学生諸君に望む」において、中学生に「吾人の国家、吾人の祖先の歴史を読み、その高尚にして興味あるに快驚を喫し、漸くその感化に打たる、及びては、遂に発奮興起し、全く日本特有の人物となり了する」ことができるとして「国史」の研究を勧める。そして自らは「国史の感化」により、「世界地図の小日本に対して、昂然として、吾国体は万国の儀表なり。生を日本に受けたるは、最大の幸福、最高の運命なりとの、万丈の光燄を放たむとするに至りし」と述べ、「吾人は諸君とともにこの楽みをともにし、その幸福をともにせん」と訴える<sup>36)</sup>。

横山の歴史教育論の特徴は、まず、中学生が学ぶ歴史を「高尚にして興味ある」歴史に限定している点で

ある。第二に、歴史教育の目的は「感化」を与えること、つまり精神的成長を促すことだとしている点である。横山は、「事実」の解明を目的とする帝国大学の歴史学の実証主義的側面を歴史教育の場で語ることはなく、歴史が教化に果たす役割に期待して、精神的な議論を繰り返すのである。要するに横山は、歴史学と歴史教育とを分離して考えていた歴史家だったのである。こうした横山の歴史教育論と比較すると、「事実」に基づいた歴史を教え、愛郷心を持って自らの住む「地方」で「生活」「活動」する子どもを育てたいとする喜田の歴史教育論は、歴史学の成果に基づいた歴史教育を志向していたといえよう。

ただし喜田も『国史之教育』においては、歴史を通じて「我が国の善美なる」ことを教え、「善良なる国民」を作することを主張しており<sup>37)</sup>、歴史に教化の役割を担わせることを否定していない。これは、喜田が「国民タルノ志操ヲ養フ」ことを求める小学校令施行規則第五条に基づいて国定教科書を編纂する立場である以上当然のことといえるのだが、喜田自身が後年「自分が一方には歴史家として立ちながら、一方には教育家として、二足の草鞋を穿いたところに間違いの根本がある」<sup>38)</sup>と回想するように、喜田が「教育家」として教育法令を意識した発言を行うとき、「歴史家」としての発言との矛盾が生じることがしばしばあった。

### 3. 喜田貞吉の歴史教育論と「実地教授」

「教育家」としての喜田の最大の特徴は、文部省図書審査官や文部編修として「実地教授」に強い影響を及ぼすことができた点である。本章では、喜田がどのような「実地教授」を期待していたのかを解明するため、国定教科書や教員、子ども向けの論説や記事を、喜田の歴史教育論の反映に注目して分析する。そこでまず、国定教科書のうち喜田が「実地教授の際に於ける説話の要領」<sup>39)</sup>とした教師用教科書を分析する。

第一に、「地方」の歴史に対する扱いを見てみたい。喜田は教師用教科書を「地方的教材を其の中から択ぶ為めの補助教材を列ねたもの」<sup>40)</sup>と説明する通り、通史の記述において「地方」で起きたできごとを詳述した部分が目立つ。例えば南北朝の動乱の際に足利尊氏が西国に逃れた時の行動について、「延元元年（紀元一千九百九十六年）春足利尊氏の京都に敗れて西国に通るや、賊名を避けんと欲し、途より使を遣はして光厳上皇の院宣を奏請せしめたり。是より尊氏は錦旗を擁して兵を諸国に募りしが、武士の之に応ずるもの頗る多く、菊池武敏の尊氏を筑前多々良浜に攻めて敗れしより、九州の豪族風を望みて尊氏に属し、西走の後僅に三箇月にして、再び大挙して近畿に逼らんとするに至れり。かくて尊氏・直義は海陸両道より進軍

し、直義先づ備後の福山城を攻めて之を陥れたり。蓋し当時新田義貞命を受けて中国地方を鎮めんとし、自ら赤松則村を白旗城に囲み、更に部将をして福山城に抛らしめたりしなり」<sup>41)</sup>と説明し、全国各地の戦場の地名や武士の名を紹介している。

第二に、「歴史地理」が取り入れられているかを見てみたい。喜田は、『国史之教育』のなかで「歴史は人間が過去に於て演じた事歴の説明で、人間が之を演ずるには必ず土地の上に於てするものである」ため、「実地教授の場合には、必ず地理科との連絡を忘れてはならぬ」と注意していたこともあり<sup>42)</sup>、地理を題材に、歴史的事象の内容やその意義を解説する記述が多い。例えば仁徳天皇の「民政」を説明する際に「難波堀江」を挙げ、「難波堀江は今の大阪市中を通ずる天満川なり。天皇即位の十一年、これを開鑿せしめて、大和川・河内川の水を引き、西海に通じ易からしめ給ひしより、附近低湿の地は変じて良好なる田地となれり。因に云ふ。現今の如く大和川が堺市の北に通ずるに至りたるは近く宝永開鑿以降の事なり」<sup>43)</sup>と解説する。なお「難波堀江」は、1900(明治33)年に「難波沿革図の偽作」を『歴史地理』第2巻第7号に発表して以来、喜田の研究対象の一つとなっていた「土地」である。

このように教師用教科書には、「地方的教材」の教授や「地理科との連絡」という形で、喜田の歴史教育論の核心的な部分が含まれることが確認できる。これらは、小学校令施行規則第五条には定められておらず、喜田の意向が反映されたとみてよいであろう。喜田は、教員が喜田の歴史教育論に基づいて「実地教授」を行うことを期待していたことが分かる。

次に、児童用教科書を分析する。児童用教科書の記述には、喜田が自らの歴史観を反映させたと考えられる箇所がある。その一例として、「延喜の治」に関する記述を挙げる。

藤原氏朝廷に勢力を得たる頃には、有力者は、多くの土地を所有して、これを荘園と名づけ、租税をも納めず、国司の干渉をも許さず、ほしいままに、天下の富を私せり。かくて、朝臣は、日日榮華にふけり、詩家管弦の遊を事として、空しく歲月を送りき。されば、表面は、きはめて、太平無事の如くなりしかども、京都は、おのづから、奢侈の風に流れ、人心、やうやく、腐敗して、他日、天下の乱るること、早く、すでに、ここに、きざせり。醍醐天皇は、御心を、深く、政治にとどめたまひ、後人、延喜の治を称すれども、それすら、うはべのみのことなりき。荘園増加し、流浪の民、年を逐ひて、多くなるに従ひ、国庫の収入減少して、朝威地方に及ばず、政府の武官微力なれば、盜賊おこれども、これを鎮むること能は

ざるに至れり。されば、有力なる人人は、多くの従者を有し、あるひは、党与を集めて、みづから、衛り、地方に抛りて、つひに、その勢力をほしいままにせり。ここにおいて、政府の武官にあらざる武士、やうやく、おこれり。中にも、源平の二氏、もっとも、あらはる。<sup>44)</sup>

ここでは、荘園が藤原氏の台頭と貴族文化の成立、朝廷の権威低下をもたらし、その結果「地方」から次の時代の支配者となる武士が登場すると記述される。一方、「地方」に力を及ぼすことができなかつた醍醐天皇の「延喜の治」は「うはべのみのこと」と評価される。この歴史認識は1898年に「延喜の世は果実の赤く熟したる皮が美しく其内部の腐敗を見たるが如し」<sup>45)</sup>と評価して以来、喜田が一貫して持ち続けたものであった。しかし、国定教科書使用以前に作成された教科書においては決して一般的ではなかつた。例えば山縣悌三郎編『帝國小史 剛定乙号卷之一』(文学社、1894年)では、「延喜天曆の治」を称揚し、その後に藤原氏の台頭と国風文化の勃興が起きたとする。荘園については後三条天皇による荘園整理令の説明箇所であられるのみであり、源氏、平氏についても都から下って反乱を討伐する、もしくは起こす存在として描かれる。つまり国定教科書には、「地方」の動きが「中央」の歴史に影響を与えるという喜田の歴史観が強く反映しているのである。喜田にとっては「事実」を記したに過ぎないのかもしれないが、結果としてこうした記述は、「地方」に住む子どもに「地方」の歴史を教える意味を提示し、喜田の歴史教育論に基づいた「実地教授」が行われる可能性を高めたといえよう。

それでは、喜田は国定教科書を使用する教員に対して、どのような教材研究を求めたのだろうか。「歴史地理」を取り入れて「地方」の歴史を子どもに教えるべきとする喜田の歴史教育論においては、教員の教材研究が重要になるはずである。事実、喜田は滋賀県で行われた講演で「歴史教授に全国共通の教案のある筈はない、歴史は地方々々に依りて余程長短斟酌宜しきを得ねばならぬ。(中略)此辺は教師が余程真偽、長短の使い分けをせねばならぬ」<sup>46)</sup>と述べ、「地方」の歴史を盛り込んだ授業を教員自らが作る必要があると訴える。

そこで喜田が教員に求めたことは、まず、「歴史地理」研究、特に「実地踏査」によって「地方」の歴史を解明することである。喜田は『歴史地理』誌上に加え、教員向けの講演においても、たびたび教員に「歴史地理」研究を勧めている。例えば下関講演会では全四回の講演の最後に、「文明の進歩」が「頗る名所古跡を破壊する」ことを惜しんだ上で、「さう云ふことがあつたと云ふことを聞いたならば先づ諸君が一番に駆付けてその土地を十分調査」し、雑誌に「記録」を登

表するか、「学校なり役場なりに残して天下後世に伝へる」よう求める。そして、「諸君の天職は小学校の小供に教ゆるばかりでなく社会にも是を教育してさう云ふことを永く伝えと云ふことを常に心掛けて貰ひたい」と締める<sup>47)</sup>。喜田は講演で教育と研究について同時に語るが多く、両者を一体と捉えていたと考えられる。

しかし喜田は歴史教育において「地方」の歴史だけを教えることには批判的で、「郷土の事柄は、其の本文の現はれた処に於て、特別に精しく説く。或は何等か関係のある事柄に遭遇した場合に、それに附けて説く」<sup>48)</sup>よう訴える。そのため、「中央」の歴史など教科書に登場する事象の研究成果を学ぶよう求める場面も少なくない。例えば教科書会社の修文館主催と思われる講演会では民族研究に関して、「教育家たる者ハ今日の専門学者の学説を聞いて之に迷はされることの無い丈けの研究は積んで置かなければならぬ」<sup>49)</sup>と述べている。また喜田自身が教員に対する「事実」の提供を目的に論文を執筆することもあった。例えば「中国考」という論文では、中国地方の「中国」が指す範囲が学校で誤って教えられていることを執筆動機に挙げ、自らの研究成果を授業や教科書編纂に活用するよう求めている<sup>50)</sup>。

そしてこうした教材研究に基づいて、「地方」の歴史に合わせた授業時間の配分や教材の選択を行うよう求める<sup>51)</sup>。すなわち喜田は「地方」の教員自身が「実地教授」において教える内容を調べ、指導に工夫を加えることを期待したのである。

さらに喜田は、教員に求めた教材研究に似た、いわゆる調べ学習を、学習雑誌において子ども自身にも促す。喜田は1901年に女学生向け雑誌である『女学世界』と『をんな』に歴史や地理に関する記事の連載を開始する。そのなかでも、『女学世界』の最初の記事である「日本名蹟雑話(一)」では、「名蹟」に関して「あらゆる山川都邑、森林藪沢、原野湖海、社寺塚墓、何れも名蹟ならぬは無き次第」と述べ、連載記事ではこうした「名蹟」を幅広く扱うと宣言する<sup>52)</sup>。そして2ヶ月後の「修学旅行の心得」では、「常によく注意して外出の機会を利用し、見る事聞く事を忽にせず、予て書物で見た所談話で聞いた所、よく之を実地に合して考へなば、たとへ近所に用足しに出づるにも、之れ直に修学旅行なり」<sup>53)</sup>と述べ、「実地踏査」に近い活動である「修学旅行」を奨励する。同様に『をんな』の最初の記事である「通俗地理談」でも、「旅行」とその「土地」の「沿革」に関する学習を勧める<sup>54)</sup>。

その後、喜田の学習雑誌への執筆は、『日本少年』『新国民』『少年』にも拡大し、明治末まで続いた。記事の多くは名所案内や古典の解説、自らの研究成果

の紹介であるが、なかには子どもの「歴史地理」研究の手助けとして書かれたと思われる記事もある。例えば「大和めぐり(つゞき)」では、垂仁天皇が埴輪を殉死の代わりとしたという伝説を否定した上で、その執筆意図を、古墳墓の年代を考えると「早合点」して、「とんだ間違に陥る事」を防ぐためだと説明する<sup>55)</sup>。また、子どもに「歴史地理」研究のきっかけを与えようとした記事も多い。例えば「陸奥と書いて何故ムツと読むか其訳と陸奥の沿革」では、陸奥の読み方とその「沿革」を説明して、「こんな具合に研究して見ると、一国の名の由来がわかるばかりでなく、同時に色々の事がわかつて、地理や歴史を学ぶにも、頗る面白い知識が得られる。諸君は更に近江や遠江や上野や下野などの読み方のむづかしい理屈を考へてみ給へ」<sup>56)</sup>と旧国名の研究を勧め、その続編の「上野下野の野が何故ツケと読むか其理由」では、「地名人名等について何の気もなしに訓んであるものの中に、考へて見れば分らない、しかも面白いものが沢山ある」<sup>57)</sup>と述べて、旧国名の研究から地名や人名の研究へと進むことを促す。

このように、喜田は子ども自身が「歴史地理」研究を行い、「地方」の歴史を学ぶことをも期待していたのであり、決して国家から教師、子どもへの一方的な歴史の押しつけを目指していなかったのである。ここに、国民教化に限定されない、多様な目的や方法、内容をもつ歴史教育(歴史学習)が生まれる可能性を見いだすことができるだろう。

## おわりに

以上、本稿では喜田が自らの歴史研究に基づいてどのような歴史教育論を生み出し、実践させようとしたのかを考察した。

「国司制之変遷」において「地方」の歴史を研究する意義を説いた喜田は、いかなる「地方」の歴史にも研究対象としての価値を認めて研究を重ね、「社会」の変遷を明らかにしようとした。またそのために、「実地踏査」を重視して現在の「地理上の諸現象」の歴史の変遷を研究する「歴史地理」という学問分野を専攻した。「歴史地理」は教育と親和的な学問分野だったこともあり、喜田は歴史研究と同時に教育にも関与した。

そして喜田は、歴史研究に基づいた歴史教育論を展開する。その特徴は、自らの住む「地方」で生涯を過ごす子どものために「地方」の歴史の教授を重視したこと、子どもの興味を引きつつ「事実」を正確に教えるための方法として「歴史地理」を教育に取り入れたこと、自らの住む「地方」を改善、発展させようとする原動力としての愛郷心、愛国心の養成を目指したことにとまとめられる。また喜田は、自らの歴史教育論や

歴史観を国定教科書に反映させ、自らの歴史教育論に基づいた「実地教授」が行われることを期待した。同時に、教員に教材研究として「歴史地理」研究や指導の工夫を求め、子どもにも自ら学ぶことを求めた。

本稿で明らかにした喜田の歴史教育論を見る限り、確かに喜田は歴史研究に基づいた歴史教育を目指していたのであり、歴史学と歴史教育を分離した人物という従来の評価は改めなくてはならない。喜田の歴史教育論は、明治後期に歴史家が歴史学の立場から歴史教育に接近したことを示す一つの証左となろう。またその内容は、柳田国男などアカデミズムや行政に近い立場の人々が提唱した郷土教育論<sup>58)</sup>の先駆けをなすものだったと評価できる。

また喜田の歴史教育論は、「地方」で生きる子どものための歴史教育を目指しながら、あくまで教授内容は歴史研究が解明した「事実」であるべきとした点に現代的意義があると筆者は考える。南北朝正閏問題以降、歴史教育では教育目的と内容の正確さのいずれか

一方を優先し、もう一方を軽視してしまう傾向があったと言わざるを得ない。現在でもなお「事実」注入型の歴史教育が一般的である一方、「アクティブ・ラーニング」型歴史学習の研究では、教育目的や方法論ばかりが議論され、教授内容に関心が集まっていない。地域史学習においても、地域活性化や郷土愛の育成を目指すあまり、正確さを欠く事象を取り上げ、子どもに教える傾向が依然残っている。教育が常に政治性を帯びる危険を孕み、歴史学と歴史教育の専門化が両者の分離を進めるならば、我々は喜田の歴史教育論を振り返る必要がある。

今後は、『歴史地理』の紙面分析や喜田以外の歴史家の歴史教育論から、明治後期における歴史学と歴史教育の関係をより多面的に捉えたい。また、喜田の歴史教育論が日本の歴史教育に定着せず、結果的に歴史学と歴史教育が分離の方向へ向かう理由を考察するために、南北朝正閏問題を再検討し、明治後期の世論は歴史教育に何を求めていたかを解明したい。

## 註

- 1) 喜田貞吉『国史之教育』（三省堂書店、1910年）70頁。
- 2) 田中史郎「喜田貞吉の「歴史教育＝応用史学」論の性格とその歴史的位置」、『社会科の史的探究』（西日本法規出版、1999年、初出1974年）、廣木尚「南北朝正閏問題と歴史学の展開」、『歴史評論』第740号（2011年）など。
- 3) 喜田「南北朝論」、『喜田貞吉著作集』第3巻（平凡社、1981年）500頁。
- 4) 喜田が保管していたと考えられる原稿、研究資料、速記録、講義ノート等を中心とする資料群である。特に、明治40年代に喜田が教員や教育関係者を対象に行った講演の速記録は、当該期における喜田の歴史教育に対する考えを知る上で大変貴重な資料である。
- 5) 喜田「国司制之変遷」、『史学雑誌』第8編第1号（1897年）43～44頁。
- 6) 喜田「遠江国浜名湖口の沿革」、『歴史地理』第1巻第1号（1899年）7～9頁。
- 7) 呦々子（喜田）「呦々齋地理雑談（三）」、『歴史地理』第1巻第3号（1899年）11頁。
- 8) 呦々子（喜田）「地名の研究に就て」、『歴史地理』第5巻第1号（1903年）75～76頁。
- 9) 「日本歴史地理研究会設立趣意書」、『歴史地理』第1巻第1号（1899年）巻頭頁。
- 10) 喜田「普通教育上の歴史」、『歴史地理』第13巻第3号（1909年）50頁。
- 11) 「大学院入学生」、『史学雑誌』第7編第9号（1896年）100頁。
- 12) 喜田「日本読史地図短評」、『史学雑誌』第8編第3号（1897年）70頁。
- 13) 呦（喜田）「大阪市の編纂事業」、『歴史地理』第2巻第4号（1900年）67頁。
- 14) 前掲註9、巻頭頁。
- 15) 喜田「国史地理資料（一）」、『歴史地理』第8巻第10号（1906年）89～90頁。
- 16) 以上、喜田「地理学に関する余輩の見解」・「地理学に関する予輩の見解（承前）」、『歴史地理』第9巻第6号・第10巻第3号（1907年）。
- 17) 「歴史地理 文学士喜田貞吉君講話」（喜田貞吉関係資料A 43）
- 18) 坪井九馬三「地理と歴史」、『歴史地理』第8巻第8号（1906年）100頁。
- 19) 岡田俊裕『地理学史 人物と論争』（古今書院、2002年）、川合一郎「喜田貞吉の歴史地理学－未発表の講演録・講義ノートの分析を中心に－」、『人文地理』第63巻第5号（2011年）など。
- 20) 「国定教科書答問」、『歴史地理』第13巻第3号（1909年）附録1頁。
- 21) 以上の参加者数と割合は、「鎌倉講演会記事拾遺」、『歴史地理』第12巻第4号（1908年）101頁、「講演会記事」、『歴史地理』第14巻第3号（1909年）57頁、「歴史地理長府講演会記事」、『歴史地理』第16巻第3号（1910年）45頁の分析による。
- 22) この経緯は、喜田「歴史地理上より新陸軍管区を評して地方行政区に及ぶ（二）」、『歴史地理』第11巻第5号（1908年）に説明されている。
- 23) 呦（喜田）「本誌の俗的發展 時事問題に関する論評を歓迎す」、『歴史地理』第12巻第3号（1908年）96～97頁。
- 24) 呦（喜田）「小学校教員諸氏に歴史地理の研究をすゝむ」、『歴史地理』第1巻第1号（1899年）28～29頁。
- 25) 前掲註1、335～337頁。
- 26) 明治30年代の史蹟顕彰運動や史蹟顕彰に対する喜田の考えについては、齋藤智志『近代日本の史蹟保存事業とアカデミズム』（法政大学出版会、2015年）に詳しい。
- 27) 呦々子（喜田）「下総国香取郡小御門村の公家塚」、『歴史地理』第2巻第2号（1900年）21頁。
- 28) 呦々子（喜田）「帝國古蹟取調会々報の後愛宕墓考を駁す」、『歴史地理』第3巻第2号（1901年）35頁。
- 29) 喜田「河内国六萬寺に於ける小楠公墳墓と云ふものに就

- て], 『歴史地理』第3巻第1号(1901年)65頁。
- 30) 麻郷(小林庄次郎)「日本歴史地理研究会第二回通俗講演会」, 『歴史地理』第3巻第12号(1901年)76頁。
  - 31) 呦々子(喜田)「地理位ならば」, 『歴史地理』第4巻第9号(1902年)104頁。
  - 32) 「喜田文学博士 地理学とは何ぞや第一回(下関講演会)」(喜田貞吉関係資料A 38)
  - 33) 「文学博士喜田貞吉君講演 歴史地理学一斑 明治四十二年十月二十五日於華族会館火曜会」(喜田貞吉関係資料A 7)
  - 34) 前掲註32
  - 35) 前掲註32
  - 36) 横山達三「史学界発刊に就き中学生諸君に望む」, 『史学界』第1巻第1号(1899年)。
  - 37) 前掲註1, 3~4頁。
  - 38) 喜田「六十年の回顧」, 『喜田貞吉著作集』第14巻(平凡社, 1982年)130頁。
  - 39) 喜田「修正日本歴史教科書につきて」, 『教育界』第9巻第5号(1910年)35頁。
  - 40) 前掲註1, 340頁。
  - 41) 『尋常小学日本歴史 巻一教師用下』(文部省, 1910年)121~122頁。
  - 42) 前掲註1, 295頁。
  - 43) 『尋常小学日本歴史 巻一教師用上』(文部省, 1910年)33頁。
  - 44) 『小学日本歴史 三』(文部省, 1903年)42~43頁。
  - 45) 大笑生(喜田)「哄笑録(二則)」, 『密巖教報』第220号(1898年)31頁。
  - 46) 岡夏樹「小学校中学校歴史教授上の注意 文学博士喜田貞吉君談話」, 『教育実験界』第26巻第3号(1910年)15頁。
  - 47) 「文学博士喜田貞吉君述 地理講義第四回」(喜田貞吉関係資料A 8)
  - 48) 前掲註1, 339頁。
  - 49) 「十二月六日修文館(第一回) 文学博士喜田貞吉君述」(喜田貞吉関係資料A 42)
  - 50) 喜田「中国考」, 『歴史地理』第3巻第10号(1901年)。
  - 51) 前掲註1, 337~342頁。
  - 52) 喜田「日本名蹟雑話(一)」, 『女学世界』第1巻第2号(1901年)57頁。
  - 53) 喜田「修学旅行の心得」, 『女学世界』第1巻第5号(1901年)80頁。
  - 54) 喜田「通俗地理談」, 『をんな』第1号(1901年)129頁。
  - 55) 喜田「大和めぐり(つゞき)」, 『女学世界』第1巻第14号(1901年)76頁。
  - 56) 喜田「陸奥と書いて何故ムツと読むか其訳と陸奥の沿革」, 『日本少年』第6巻第8号(1911年)50頁。
  - 57) 喜田「上野下野の野が何故ツケと読むか其理由」, 『日本少年』第6巻第10号(1911年)79頁。
  - 58) 伊藤純郎『増補 郷土教育運動の研究』(思文閣出版, 2008年, 初版1998年)参照。